

お薬のしおり

外用ステロイド剤の正しい使い方 No.55 (H18.4)

東京医科大学病院 薬剤部

外用ステロイド剤の使用に関して不安を抱いている患者さんは多いと思います。しかし、使う前から漠然とステロイドは怖いものとの不安が病気を悪化させる原因にもなっています。ここでは、ステロイドとは何なのかということを知り、そのうえでどのように使えばよいのか？ 使う上で守らなければならないことは何か？ ということを中心にお話しようと思います。

ステロイドとは？

ここでいうステロイドとは、人間の体の中にもともと存在する副腎皮質ホルモンの一種です。その働きは炎症を抑える作用、免疫能力を調節する作用、糖や脂質の代謝を調節する作用、体内のナトリウム・水のバランスを制御する作用などたくさんあります。外用ステロイド剤とは、この多くの作用の中から、「炎症を抑える作用」に注目して作られた薬です。皆さんがよく耳にする「ステロイドの強さ」というのは、この炎症を抑える強さのことを指していて、現在5つのランクに分類されています(*)。医師は皮膚疾患の種類、炎症の起きている部位や程度、患者さんの年齢などを考えて適切なランクのステロイドを処方します。例えば、顔・首・脇などはステロイドの吸収性が高いので中等度かそれ以下のものを、幼小児・お年寄りの場合は成人に比べて弱めのものを、重症の病変で自覚症状が強く、短期間で使用が終了すると思われる場合は強めのものを選択します。

つまり、処方されたステロイドは、患者さんそれぞれの疾患・部位に合わせて使うオーダーメイドの薬と言えます。薬が余ったからといって、違う場所に塗ったり、ほかの人に使わせたりはしないようにしてください。

ステロイドの副作用について

ステロイドの副作用でよく「骨がもろくなる」「顔が丸くなる」「糖尿病になる」ということがいわれます。これは主にステロイドの注射や飲み薬による全身性の副作用のことです。外用ステロイド剤では皮膚に直接作用するため、副作用の多くは塗った患部にとどまります。通常の使用量であれば上記のようなことは起こりませ

ん。

塗り薬としての副作用には「皮膚が赤くなる」「にきびが悪化する」などがありますが、これらの副作用はステロイドのランクを下げたり、使用する量を減らしたりすることで回復することが分かっています。しかし、自分勝手な判断で量を減らしたり、使うのをやめてしまうとステロイドで抑えていた症状が再び悪化してしまう原因になってしまうので絶対にやめましょう。おかしいな？ いつもと違うな？ と感じたらすぐに医師に相談しましょう。

ステロイドを正しく使うためには、まず何よりもステロイドを使うことに対しての不安や心配を解消させることです。それにはステロイドに対する正しい知識を身に付けることが大切です。不安な点、分からないことがある場合は医師や薬剤師に相談してみてください。そして正しい知識を身に付け、十分に納得した上で適切な治療に望みましょう。

(*) 東京医科大学病院で採用している外用ステロイド剤の種類とランクは次の通りです。

	ステロイド名	商品名
strongest	プロピオン酸クロベタゾール	デルモベート
very strong	プロピオン酸デキサメタゾン	メサデルム
	吉草酸ジフルコルトロン	ネリゾナ
	アムシノイド	ピスターム
	酪酸プロピオン酸ヒドロコルチゾン	パンデル
	ジフルプレドナート	マイザー
	酪酸プロピオン酸ベタメタゾン	アンテベート
	フランカルボン酸モメタゾン	フルメタ
strong	吉草酸ベタメタゾン	トクダーム
	プロピオン酸ベクロメタゾン	プロパデルム
	吉草酸酢酸プレドニゾロン	リドメックス
	吉草酸デキサメタゾン	ザルメックス
mild	酪酸クロベタゾン	キンダベート
	酪酸ヒドロコルチゾン	ロコイド
weak	フルドロキシコルチド	ドレニゾン

軟膏とクリームでランクが上下するものがありますので、表は一応の目安です。